

---

紙 碑 In Memoriam

---



小林桂助 (1908-2000)

小林桂助氏を悼む

森岡弘之

国立科学博物館

本会元評議員の小林桂助氏は、今年（2000年）1月10日、93歳で急逝された。高齢とは云え、昨年11月に入院中の小林さんを見舞った時にはまだまだお元気の様子であったので、突然の訃報に吃驚した次第である。

小林さんは1908（明治41）年6月6日の生まれで、誕生時の名前は小林賢三、1933（昭和8）年父親の二代目小林桂助氏の死去に伴い25歳で家督を相続し、三代目小林桂助を襲名した。小林家は毛皮・樟脳・薄荷などの天産物を扱う貿易商を家業とし、初代小林桂助氏は群馬県の出身の由だが、関東大震災前は横浜の保土ヶ谷に住居を構えていた。従って、小林さんは少年時代を横浜で過ごした。小林家は大地震で店・工場・標本類を失い、それを転機に神戸市六甲へ転居した。関東大震災では初山徳太郎氏と農商務省（当時）も標本を消失した。現存の小林標本や初山標本は震災以後のものである。小林さんは1932（昭和7）年に神戸商大（現 神戸大）を卒業している。

小林さんの父の二代目小林桂助氏は、家業の傍ら鳥類研究や鳥類・鳥卵標本の収集に興味を持ち、黒田長禮・鷹司信輔・松平頼孝・内田清之助などの諸氏、特に内田氏と親交を重ね、寺田直（オーストンの採集人であったが、後に小林家のお抱えとなり、ミクロネシアなどで鳥類を採集した）などの標本採集者の庇護にも努められた方である。この桂助氏が鳥類および鳥卵標本の収集を始めた経緯については聞きもしたが、家業が毛皮などを

扱っていたので、鳥獣類に対する関心は深かったであろう。しかし、年代的に見て、同じ横浜に居住し、標本収集を通じて初期の日本の動物学に貢献したアラン・オーストンから刺激を受けたことも確かであろう（両者の間に直接交流があった可能性も高い）。

小林さんは、父親の影響で子供の頃から鳥類に興味を持ち、小学校に上がる頃には日本はもちろん、台湾の鳥の名までみな知っていたという（本誌25巻99号）。また、大学生の頃には鳥類だけでなく、蝶類やカミキリムシ類の標本も集めており、大雪山に登ってナキウサギを発見する（1929年）などしている。

戦前、小林さんは鳥と鳥卵を求めて日本全国を歩かれたが、特に琉球諸島（鳥6巻30号、1930；野鳥7巻8号、1940）、大雪山（台湾博物学会会報21巻116号、1931；野鳥7巻2号、1940）、下湧別（鳥7巻31号、1931；野鳥8巻11号、1941）、南千島色丹島（鳥8巻36号、1933；野鳥6巻1号、1939；南千島色丹誌、1940）などではすぐれた観察記録を残した（括弧内は主要文献）。

山階芳麿博士なども熱心に鳥卵を収集していたが、小林と云えば鳥卵のコレクションを思い浮かべるほど、小林さんの鳥卵収集は内外に有名だった。そうなった主な原因は“The Eggs of Japanese Birds”（小林自刊、1932-40）の刊行であろう。この本は解説が全部英文で、208種1,440卵を64原色図版に、また巢の写真を38モノクローム図版に収録したもので、著者は小林桂助（先代）・石澤健夫である。しかし、実際の執筆者はわが小林さんであった。「大学生の頃、親父の命令で見よう見まねで書いた。赤面ものだがね」というのが本人の弁である。今見ると、確かに赤面ものの個所がいくつもあつた。しかし、当時としては、一国の鳥卵図譜を刊行していたのは英・独・仏ぐらいで、極東の国でそのようなものが出版されたことは驚きの目で迎えられ、国際的に非常に高い評価を得たのである。

小林家は幸い戦争の災害を免れた。戦後の小林さんの最初の大事な仕事は「原色日本鳥類図鑑」（保育社、初版1956）である。戦前に内田清之助や黒田長禮の鳥類図鑑があり、下村兼史・中西悟堂・榎本佳樹らのフィールドガイドもあった。しかし、みな帯に短し褌に長しで、使い勝手のよいものがなかった。小林さんの図鑑は迷鳥も含めた日本産鳥類全種の原色図鑑で、必要かつ簡潔な内容にまとめられ、このため非常に好評を博し、学術的な貢献だけでなく、野鳥知識の普及にもきわめて重要な役割を果たした。原色図版を担当した宮本孝氏の原色図も、かなり派手で誇張的であったが、同定にはよく役立った。もともと図鑑の絵は同定に役立つかどうかが重要で、実物にどれだけ近いかは二次的な問題である。私が、図鑑の絵としては小林重三氏の絵は買わない、という理由もこの辺にある。例えば、Roger Petersonの絵はまさにフィールドガイド用のものであって、美術画でも標本画でもない。

小林さんの次の大きな鳥学上の仕事は、大阪湾住之江に渡来するシギ・チドリ類の調査であった。同じ時期に関東ではC. M. Fennell（アメリカ人）、橋川次郎、私らが千葉県浦安の干潟でシギ・チドリ類の調査を始め、小林さんとはよく連絡を取り合ったものである。浦安の方は、その後3人がばらばらとなり、数年しか続かなかったが（高野伸二氏らの新浜グループの活動より7-8年前のことである）、住之江の調査は1950年から1956年までの7年間に231日調査し、私も京都大学大学院生の頃は参加させてもらった。その結果は、「大阪湾に渡来するシギ・チドリ類」（著者自刊、1959）として結実した。わが国でのこのような調査には、黒田長禮氏の「六郷川口に於ける鶺鴒千鳥類の渡り」（日本鳥学会、1919）や、熊谷三郎氏の「宮城県若柳付近に於ける鶺鴒・千鳥類の渡り」（鳥3巻14、15号、1923）などがあるが、小林さんの住之江での調査に規模では匹敵しない。一口に7年間231回と云うが、これは7年間を通して渡りの季節にはほとんど毎日毎日調査に通った記録である（渡りの季節以外にも回数は少ないが調査している）。調査が中止されたのは、主として干拓の進行による干潟の減少のためだが、一部のバードウォッチャーの採集に対する嫌がらせも係わりなしとは云えない。学術研究のための標本収集の重要性・正当性については、鳥類保護の最先進国のアメリカの鳥学会（AOU）が何度も公的に意見を表明している（最近では1998年発行のCheck-list N. Amer. Birdsのまえがきにおける分類・命名委員会の意見）。もちろん、絶滅の恐れの高い種（例えばノグチゲラなど）の採集は無論、足環付けや採血なども控えるべきである。

小林さんは、戦後のある時期から「鳥」や「野鳥」への投稿をやめ、執筆の場をもっぱら「日本雉水鳥協会機関誌」や「鳥と自然」などに見出ししていた。したがって、発表されたものの多くが学術論文の形式をとっていないが、小林さんならではのものが沢山ある。なかでも、亡くなる1年半前に発表された「抱卵性ホトトギス類と寄託種との卵」（鳥と自然89号、1998）は、多年にわたり収集した標本に基づく研究であり、小林さんの鳥卵収集の「決算書」と云うべきものであろう。

鳥類研究者としての小林さんの特筆すべき特徴のひとつは、古き良き時代の本来のアマチュア博物学者の特質を受け継いでいたことだが、それについては「鳥と自然」の小林桂助追悼号（2001）に書いたので省略する。しかし、それにつけても時代に古きも良きもあるべきではなく、昨今の経営者や政治家の公私混同ぶり・無節操ぶ

りは恥知らずのきわみである。いっぽう、小林さんは自身でもコレクションの研究を行っていたが、鳥類なら黒田長禮氏や羽山徳太郎氏、ナキウサギは岸田久吉氏というように、研究を専門家の手に委ねていた。ここにもオーストンのイギリス人的信条の継承が窺われる。オーストンも小林さんも、自身では新種や新亜種を発表しなかった（ただし、昆虫類には小林さんの命名の新種があるかも知れない）。

小林さんは戦前から多くの鳥学者と交流を持ち、記憶力がまたよく、つまらぬことでも正確に憶えていられたので、話題が常に豊富であった。亡くなった今しきりに思うことは、いろいろなことをもっとよく聞いておくべきだった、ということである。特に戦前の標本採集家、標本商、剥製師などの生い立ち、業績、人となりなどは文献的資料が乏しいので、小林さんは最後の生き証人として掛け替えのない人だった。例えば、長興<sup>ながと</sup>標本店は大正の初めには琉球や小笠原の標本まで取り扱い、店は横浜の某所（場所も教わったのにメモしてなかったのは残念）にあった、という。

まだまだ書きたいことは山ほどあるが、最後に小林家が二代にわたって本会にして下さった金銭的援助について触れておかねばならない。その最初は本会設立直後のマイクロネシアの鳥学的探検(1915年)で、小林家が資金と採集者の寺岡直氏を提供し、鷹司・黒田(鳥1巻2号, 1915)が成果を公表している。鳥1巻1号の第一回鳥学的探検の記事中、会員小林友三<sup>ゆうぞう</sup>とあるのが先代小林桂助氏である。爾来、小林親子は機会あるごとに本会に対し金銭的援助を惜しまれなかった。もちろん、小林さん一人で本会を支えられたわけではないが、本会は創立以来1980年代の初め頃までは会費だけでは万年赤字団体で、有力会員の寄付と臨時刊行物などからの収益でどうにか台所を賄ってきたのである。会費だけでなんとか会誌が出せるようになったのは最近15年ぐらいのことにすぎない。なお、小林さんの本会評議委員歴は1947-1981年である。小林さん所蔵の動物学関係の標本類は一切、兵庫県立人と自然の博物館に寄贈された。

以上、小林さんの鳥学的業績について述べ、また小林さん父子の本会に対する多年にわたる物心両面のご援助を記して、小林さんのご冥福を祈ります。